

海外ワークショップ・セミナー報告

報告者：池田玲子・神村初美

| | | |
|----|--------------------|--|
| 1. | 日程 | 2015年 09月 19日 (土) |
| 2. | 地域 (概要含む) | インドネシア ジャカルタ (アルアザール・インドネシア大学) |
| 3. | 担当者 (人数・役割) | 講演：池田玲子 (鳥取大学)・神村初美 (首都大学東京) ワークショップ：池田玲子 (鳥取大学)・神村初美 (首都大学東京) |
| 4. | 形態 | 講演・ワークショップ |
| 5. | 主催 | インドネシア日本語教育学会ジャボデタベック支部 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター共催 |
| 6. | テーマ (タイトル) | インドネシア日本語教育学会ジャボデタベック支部 第15回年次セミナー 「日本語教育のピア・ラーニング 授業デザインのために」 |
| 7. | 内容の概要 | <p>◆講演 (池田玲子)「日本語教育のピア・ラーニング —授業デザインのために—」</p> <p>◆ワークショップ (池田玲子・神村初美)</p> <p>自己紹介活動 (シールで自己紹介)</p> <p>宿題と教室活動の関係 語彙学習のための活動</p> <p>ピア・ラーニング授業体験① (素材：4コママンガ)</p> <p>ピア・ラーニング授業体験② (素材：昔話)</p> <p>ピア・ラーニング活動デザイン体験 (素材：新聞・雑誌の写真)</p> <p>◆講演 (神村初美)「ピア・ラーニングを聴解の授業に用いる—それぞれの理解深化を目指して—」</p> |
| 8. | 参加者 (人数・背景・声など) | 79名 (大学の教師65名、塾の日本語講師5名、高校の日本語教師8名、その他6名) インドネシア人教師が90%、日本人教師が10%程度でした。 |
| 9. | 担当者の内省 | <p>全体について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月に続いての計画だったので、メールを通じての方法だったにも関わらず、顔の見えるかのような対話で進めることができ、最終的には現地企画チームの計画案で実施することができました。 ・会場に掲げられた大きな横断幕、案内学生、受付、資料、お茶と菓子に至るまで十分に準備、配慮された会場でした。 ・冒頭で、アルアザール・インドネシア大学の学長が挨拶されたことでもこのセミナーのジャカルタでの位置づけが想像されました。 ・5月のワークショップ後の関係者会議の席で、ランドテーブルをこちらから提案しておきながら、その後は、私からはとくに具体案を出すことはできなかったのですが、当日の様子をみると、予想以上に工夫されたものとなっていたことに驚きました。 ・ラウンドでの議題は、企画側がすでに参加者に提示済みで、どのテーブルに参加するのかが参加者には知らせてありました。また、各グループごとの発表の際のフレームも用意されていたので、初めてのランドテーブルへの参加であっても戸惑うことのない仕掛けが、十分にできていたと感じました。 |

| | | |
|-----|--------|---|
| | | <p>講演部分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回のワークショップにおいて、インドネシアの日本語教師たちのコミュニケーション参加度が高いことがわかっていたので、今回もなるべく活動を含んだかたちで講演を進めてみました。しかし、さすがにアイスブレイク抜きでは最初の入りが難しい様子が見られました。しかし、これが後半でのやり方を工夫する手がかりとなりました。 <p>ワークショップ部分</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介活動から入り、いくつか学生体験をしてもらいました。どの活動についても、参加者の皆さんは学生になりきって参加しているかのように見えていましたが、実は教師である自分自身が楽しんでいるという様子でもありました。これをみて、この機会が教師たちの教室での実践の開始のきっかけとなることが期待されました。 ・今回のワークショップの活動デザイン体験では、事前に準備した素材が、機器の状態により使用できない事態となり、急きょ新聞や雑誌に載っていた写真を素材として使う場面がありました。その際は、直前の予定変更であったため、進行上、多少バタバタとしたのですが、参加者の皆さんが、すぐに積極的に活動に参加してくださり、会話も活発に行われ、かつ和気あいあいとした雰囲気を取り組んでくださいました。例えば「大人ってなに？」という問いかけに対し、「時計」の写真を選び、「大人は時間からストレスを感じる」、「登山をしている人」の写真から、「苦しいことを乗り越え、それでもまだ登り続けるのが大人」など、いろいろな解釈や、インスピレーションが次々と飛び出し、結果、私たちが想像できないようなすてきな物語の活動に変身して行って、感激しました。教師自身がこのように快活で柔軟な発想をお持ちのインドネシアは、ピア・ラーニングに対するもともとの素地があり、改めて、ピア・ラーニングのこれからの可能性を秘めているお国だと思いました。 ・あえていえば、大きめのテーブルで、活動の素材となるものをグループ内で共有しながら議論を進められる環境であれば、より一層活発な議論ができたのではないかと思います。 ・全体として、予想以上に参加度の高いワークショップだったと思いました。 |
| 10. | 次回への課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・今回、会場に用意していただいたPCでPDFがうまく反映されない（白紙の状態に映る）、マウスが機能しないなどのアクシデントがあった。日本と海外では機器の状況や会場の設備も異なるので、お国事情にうまく対応するためにも、事前に確認するなどの時間的余裕が必要だと改めて感じた。 ・グループ分けの方法を提示する意味で、くじ引きなどを紹介するのだが、今回のように現地の事情に通じたスタッフによって編成をしてもらったほ |

うが、活動がスムーズに進むと感じた。しかし、どこでも可能な依頼ではないかもしれない。

・会場については、事前に何度も情報提供があったものの、想像以上の空間で驚いた。ただ、事前のやり取りで机の種類などある程度はイメージできたので、用意する資料の形も準備することができた。今後、事前の会場チェックがあるといいと思う。

会場での様子

①用意された横断幕



②開会



③アルアザール・インドネシア大学 学長のご挨拶



④「本日の目的」を説明している池田先生



⑤セミナーの様子<真剣に聞き入る参加者の皆さん>



⑥ラウンドテーブルの様子<積極的に話し合う参加者の皆さん>



⑦全体集合写真

